

日蓮大聖人御書全集

しよきよう

ほけきよう

なんい

こと

諸経と法華経と難易の事

新版
1344
）
1346

諸経と法華経と難易の事

弘安3年('80) 5月26日 59歳 富木常忍

問うて云わく、法華経の第四の法師品に云わく「難信難解」

云々。いかなることぞや。

答えて云わく、この経は、仏説き給いて後、二千余年

にまかりなり候。月氏に一千二百余年、漢土に二百余年を

経て後、日本国に渡つてすでに七百余年なり。仏の滅後に

この法華経のこの句を読みたる人、ただ三人なり。いわゆ

る、月氏には竜樹菩薩、大論に云わく「譬えば、大薬師の

よ ぞく ぐすり とううんぬん りゆうじゆ

能く毒をもつて薬となすがごとし」等云々。これは、竜樹

ぼさつ なんしんなんげ しじ よ たま かんど てんだい

菩薩の「難信難解」の四字を読み給いしなり。漢土には天台

ちしやだいし もう ひと よ い こんとう せつ もつと

智者大師と申せし人、読んで云わく「已今当の説に最もこ

なんしんなんげ うんぬん にほんこく でんぎようだいし よ い

れ難信難解なり」云々。日本国には伝教大師、読んで云わ

いせつ しじ きよう こんせつ むりようぎきよう とうせつ なはんぎよう い

く「已説の四時の経、今説の無量義経、当説の涅槃経は易

しんいげ ずいたい ゆえ ほけきよう もつと なんしん

信易解なり。随他意の故に。この法華経は最もこれ難信

なんげ ずいじい ゆえ とううんぬん

難解なり。随自意の故に」等云々。

と かい ちろ

問うて云わく、その意いかん。

こた い いしんいげ ずいたい ゆえ なんしんなんげ ずい

答えて云わく、易信易解は随他意の故に、難信難解は随

じい ゆえ うんぬん
自意の故なり云々。

こうぼうだいし

にほんこくとうじ

もんじん 思

ほけきよう

弘法大師ならびに日本国東寺の門人おもわく「法華経は

けんきよう

うち

なんしんなんげ

みつきよう

あいたい

いしんいげ

顕教の内の難信難解にて、密教に相對せば易信易解なり」

うんぬん

じかく

ちしよう

もんけおも

様

ほけきよう

だいにちきよう

云々。慈覚・智証ならびに門家思うよう「法華経と大日経

なんしんなんげ

だいにちきよう

ほけきよう

あいたい

はともに難信難解なり。ただし、大日経と法華経と相對せ

ほけきよう

なんしんなんげ

だいにちきよう

もつと

なんしんなんげ

ば、法華経は難信難解、大日経は最もこれ難信難解なり」

うんぬん

にぎ

にほんいちどう

にちれん

よ

い

げどう

云々。この二義は日本一同なり。日蓮、読んで云わく「外道

きよう

いしんいげ

しようじようきよう

なんしんなんげ

しようじようきよう

いしん

の経は易信易解、小乗経は難信難解。小乗経は易信

いげ

だいにちきようとう

なんしんなんげ

だいにちきようとう

いしんいげ

はんにやきよう

易解、大日経等は難信難解。大日経等は易信易解、般若経

は難信難解なり。般若と華嚴と、華嚴と涅槃と、涅槃と法華

と、迹門と本門と、重々の難易あり」。

問うて云わく、この義を知つて何の詮か有る。

答えて云わく、生死の長夜を照らす大灯、元品の無明を切

る利剣は、この法門に過ぎざるか。随他意とは、真言宗・

華嚴宗等は随他意の易信易解なり。仏、九界の衆生の意樂

に随つて説くところの経々を随他意という。譬えば賢父

が愚子に随うがごとし。仏、仏界に随つて説くところの

経を随自意という。譬えば聖父が愚子を随えたるがごと

にちれん

ぎつ

だいにちきよう

けごんきよう

ねはんぎようとう

かんが

し。日蓮この義に付いて大日経・華嚴経・涅槃経等を勘え

みそうろう

みな ずいたい

きようぎよう

見候に、皆、随他意の経々なり。

と

い

ずいたい

しようこ

問うて云わく、その随他意の証拠いかん。

こた

い

しようまんぎよう

い

ひほう

き

答えて云わく、勝鬘経に云わく「非法を聞くことなき

しゆじよう

にんてん

ぜんこん

じようじゆく

しようもん

もと

衆生には、人天の善根をもつてこれを成熟す。声聞を求

もの

しようもんじよう

さず

えんがく

もと

もの

えんがくじよう

むる者には声聞乗を授け、縁覚を求むる者には縁覚乗を

さず

だいじよう

もと

もの

さず

だいじよう

うんぬん

授け、大乘を求むる者には授くるに大乘をもつてす」云々。

いしんいげ

こころ

けごん

だいにち

はんにや

ねはんとう

易信易解の心これなり。華嚴・大日・般若・涅槃等、また

かくのごとし。

「その時、世尊は、薬王菩薩に因つて八万の大士に告げ

やくおうぼさつ

よ

はちまん

だいじ

つ

たまわく『薬王よ。汝はこの大衆の中の無量の諸天・

りゆうおう

やしや

けんだつば

あしゆら

かるら

きんなら

まこらが

竜王・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦楼羅・緊那羅・摩睺羅伽、

にん ひにん

びく

びくに

うばそく

うばい

しやうもん

人と非人、および比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷、声聞を

もと

もの

しやくしぶつ

もと

もの

ぶつどう

もと

もの

み

求むる者、辟支仏を求むる者、仏道を求むる者を見るや。

とうるい

ほとけ

みまえ

みやう

かくのごとき等類、ことごとく仏の前において、妙

ほけきやう

ちげげいっく

き

いちねん

ずいき

われ

みな

法華經の一偈一句を聞いて、一念も随喜せば、我は皆ため

まさ

あのくたらさんみやくさんぼだい

う

じゆき

もん

に当に阿耨多羅三藐三菩提を得べしと授記す』と文。

しよきやう

にん

ごかい

てん

じゆうぜん

ぼん

諸經のごとくんば、人には五戒、天には十善、梵には

じひきしや まおう いちむしや びく にひやくごじゆう びくに

慈悲喜捨、魔王には一無遮、比丘には二百五十、比丘尼に

ごひやくかい しようもん したい えんがく じゆうにいんねん ぼさつ ろくど

は五百戒、声聞には四諦、縁覚には十二因縁、菩薩には六度

たと みず うつわ ほうえん したが ぞう てき したが ちから

なり。譬えば、水の器の方円に随い、象の敵に随って力

い ほけきよう うちぶ ししゆ みないちどう

を出だすがごとし。法華経はしからず。八部四衆、皆一同に

ほけきよう えんぜつ たと じようぎ ま けず ししおう

法華経を演説す。譬えば、定木の曲がりを削り、師子王の

ごうじやく きり だいき い

剛弱を嫌わずして大力を出だすがごとし。

みようきよう いっさいきよう けんもん だいにち さんぶ

この明鏡をもつて一切経を見聞するに、大日の三部、

じようど さんぶとうかく な じうほう

浄土の三部等隠れ無し。しかるを、いかにやしけん、弘法・

じかく ちしよう おんぎ もと ぎ おんもつ

慈覚・智証の御義を本としけるほどに、この義すでに隠没し

て、日本国四百余年なり。珠をもつて石にかえ、梅檀を凡木

売

にうれり。

ぶつぼう 漸 てんどう せけん じよくらん ぶつぼう

仏法ようやく顛倒しければ、世間もまた濁乱せり。仏法は

たい せけん 影 たいま かげ 斜

体のごとし、世間はかげのごとし。体曲がれば影ななめなり。

さいわ わ いちもん ぶつゐ したが じねん さはにやかい

幸いなるは我が一門、仏意に随つて自然に薩般若海に

るにゆう くる せけん がくしゃ ずいたい しん くかい しず

流入す。苦しきは世間の学者、随他意を信じて苦海に沈ま

いさい むね もう そうろう きようきようきんげん

ん。委細の旨、またまた申すべく候。恐々謹言。

ごがつにじゆうろくにち にちれん かおう

五月二十六日 日蓮 花押

ときどのごへんじ

富木殿御返事

